

特260

868

亂曲  
上卷  
中卷  
下卷

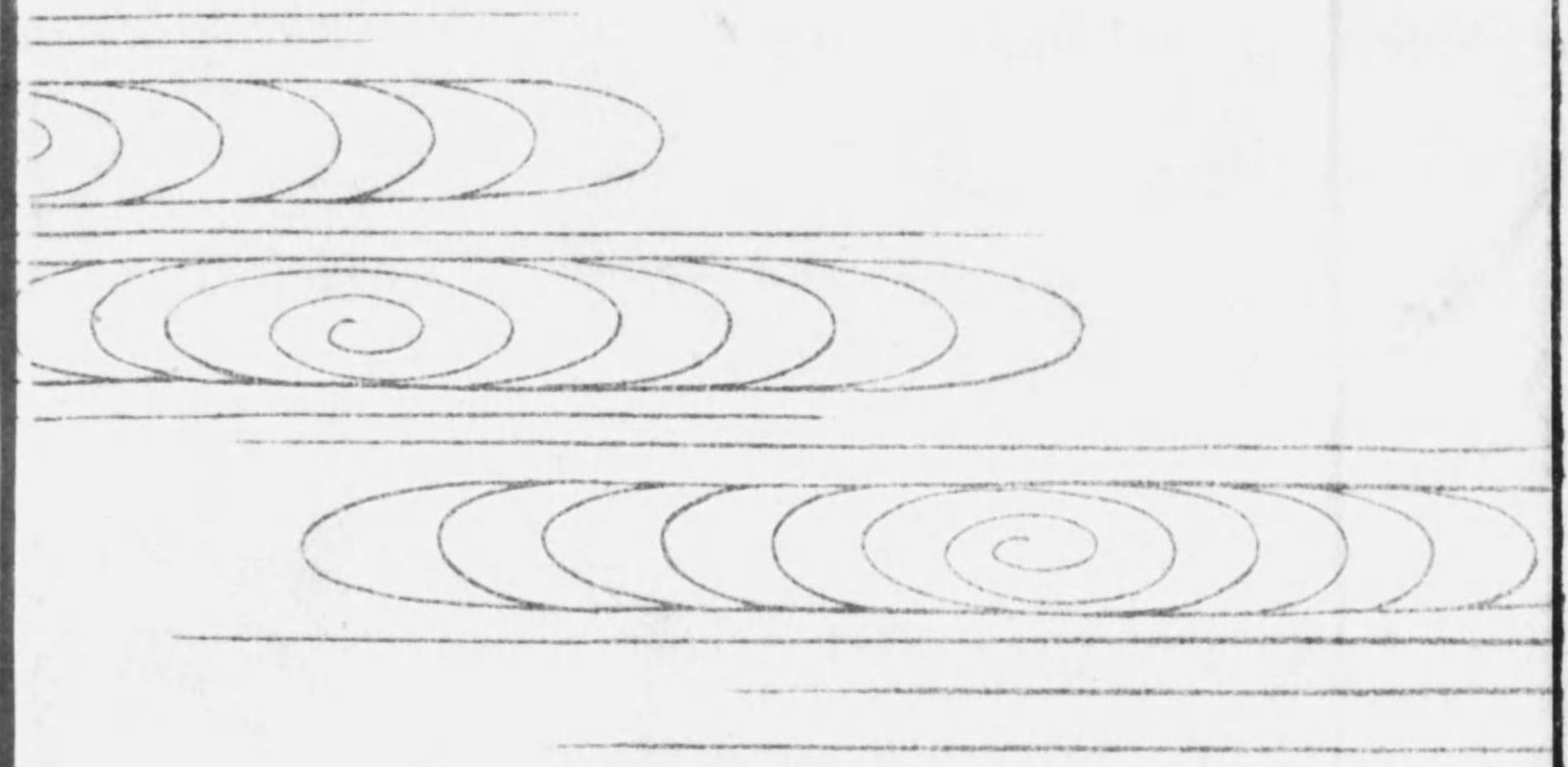
卷外

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



持 260  
868



亂曲上卷



玉取

和國

鼓の籠

定家一字題

近江八景

四季

香推

實方



玉取

<sup>ヨサシ上</sup>邪見偷盜は貧困の因縁慈悲  
<sup>クセ中</sup>側隱は富貴榮華の基とかや  
 世に四恩あり。天地の恩國王の恩  
 衆生の恩父母の恩中にも重  
 きはこれ父母の恩とかや。重華  
 はかたくななる。父に仕へしその

故に。虞舜の君といつがれ。郭巨  
は母を養ひ孝行の心深きゆゑ。  
金釜を堀りしためあり。面  
夢父を討ち。天雷終に身を裂  
き。姪婦は母を亡しつ。靈蛇命  
を奪へり。無上世尊もその  
昔阿難に對しおはし。恩重

經を説き給ひ。物利天によりて  
は。安居の法を説き給ふも。御  
母摩耶夫人の孝養の為なり。  
君子の五常。釋門の五戒までも。  
た。孝行の心ぞ基なりける。

近江八景

あれに見えたる比良の山。小松が

原に吹く嵐は。山市の晴嵐もか  
くやらんと思はれ。真野の入江の  
洲崎の真砂は。雪かと思えて江  
天の暮雪に異ならず。あら面白  
やと見る程に。いと心の澄み渡る  
堅田の浦の釣舟の。沖より家  
路に急ぐをば。遠浦の帰帆か

うち眺め雲の一むら残れるは夜  
の雨の名残か。さて比叡山の鐘  
の聲を遠寺の晩鐘か。とうち聞  
きとれ。唐崎の洲崎に翅を垂る  
る。沙鷗平沙の落雁に。これとな  
ぞらへ。さて洞庭の月には。鏡の山を  
喩へたり。誰を漁村の夕照に釣

垂る者とは思ふべし釣垂る者  
と思ふべき

和國

さればにや畜類も歌を詠ずる  
たぬしあり濱の真砂を歩み行  
く蛙の道の跡見れば佳吉の海士  
のみるぬにあらぬどもかりにぞ

人に又訪はれぬると水に住める  
蛙まで和國の風俗神の時代より  
生まれりさればにや唐土に詩を  
作る諸人は三界をながむるに花  
鳥風月松風の松語鼓は波の音  
笛は龍の吟をもつて舞樂を  
も作りたりた人ば亂舞歌道に





と面白さに山路の憂きや忘るらん

鼓の籠

サシ上  
ともそも春の夜の一時花に清  
香月に陰惜しまるべしや時  
もげに及ぶかたなき上旬の空色  
ものどけき春の日の流にひかる

盃の手まづさへまじる心かな  
前に酒を酌んで紅色を飲むと  
かやげに面白や盃の光も廻る春  
の夜の有明桜照りまさり天  
花に酔つりや流水も雲なりげ  
にあくがら春なれやわれと心に  
誘はれて都は遙々と跡に霞の

薄衣。日も夕暮は過ぐれども。  
 そのまゝに長居して花に名残は  
 有馬山鼓の籠に時移り宿を  
 花に刈藻かく猪名野も近かりき  
 床は露の笹枕。深山隠れの曉  
 に遠寺の鐘もかすかにて。深洞に  
 風すぼく。老檜悲しむ聲も袂を

うらほすや。猿子を抱いて清嶂の  
 際にかつりぬ鳥花を啣んで碧  
 巖の前に落つなるも。今更思  
 ひ知られたたり。花見すはいかでか  
 この山に夜明かさん

香推

皇太后の宣旨の趣。審かに申し

ければ日本は神國なり賢王たり  
いかで宣旨を背くべきか  
龍女の身として人皇の后に立たん  
事且は面目たるべしとてこの二つ  
の珠を奉りけりクセカハ干珠といふ  
は白き玉満珠といふは青き玉豊  
姫と右大臣に持たせ参らせして三

日と申すに龍宮を出で皇后に参  
らせさせ給ひけりかの豊姫と申  
すは上野の明神の御事阿曇部  
の磯良と申すは筑前の國にては  
志賀の島の明神常陸の國にて  
は鹿島の大明神大和の國にては  
春日の大明神一體分身同體異

名顯れて、清代を守り給へり。  
その後皇后は仲哀天皇の御笏  
を悉くも取り出だり。かすひの濱  
にある椎の木の三枝に置き奉り  
給ひしに、この香椎の香しき  
事。諸方に充ち満ちて、逆風に  
も薫すなる。圓生樹にも異ならず。

さてこそこの浦もとはかすひと  
いひけるを。香ばしき椎の字に書  
き改めて、今までも香椎の浦  
風の治まる。清代となるとかや

定家一字題

クセト、  
ヨクヤク  
はまづ。霞。鶯。梅。柳。蕨。櫻。桃。梨。雉

や雲雀なく蛙董欵冬躑躅藤夏  
にもなれば菱草時鳥五月雨た  
く水鶏に橘螢や蟬に扇蓮泉  
や秋は又萩萩露の落蘭雁鹿  
虫に霧の月鶉や鴨に菊鳥紅葉  
や冬は又時雨降り置く霜氷霰  
雲に雪鴨鷹鷹衾推と書かれたり

實方

サシ上  
これば心を種として花も栄ゆ  
く言葉の林紀の貫之も書き  
たるなり在原の業平はその心  
あまりりて言葉は足らず喻へば  
凋める花の色なうて匂ひ残るに  
異ならず宇治山の喜撰が歌は

その言葉かすかにて秋の月の  
雲に入る小野の小町は妙なる花の  
色好み歌の様さへをうなにてた  
弱々と詠むとかや 大伴の黒主  
は薪を負へる山人の花の蔭に休  
みて遠らに目をや送るらんぞれ  
らは和歌の言葉にて心の花をあ

らはす。千種を植うる吉野山落  
花は道を埋めども。去年の枝  
折ぞくくべなる。

亂曲中卷

内府

徑山寺

島廻

阿古屋松

上宮太子

反魂香

松浦物狂

笠取

蛙

内府

<sup>サシ上</sup>されば、<sup>ヨシ</sup>瀬川の<sup>ニ</sup>水にて<sup>テ</sup>耳を洗ひ。  
 首陽山に<sup>ニ</sup>蕨を折<sup>リ</sup>し<sup>賢</sup>人も。  
 勅命は<sup>背</sup>か<sup>ず</sup>。その<sup>上</sup>心地<sup>観</sup>經  
 の<sup>文</sup>を見<sup>る</sup>に<sup>世</sup>に<sup>四</sup>恩<sup>バ</sup>。天地の  
 恩國王の<sup>恩</sup>。父母の<sup>恩</sup>。衆生の<sup>恩</sup>。  
 その<sup>中</sup>に<sup>最</sup>も<sup>重</sup>きは<sup>朝</sup>恩<sup>なり</sup>。



普天ハツテンの下王土ノシノミツチにあらずとトいふ事コト  
 なしナシなればナレバや十善萬乘ジュッセンマンジョウの御ミ  
 位イは諸々の神モロモロノカミたち結番ムスビバシし守りモリ  
 給タマハふとかトカ神カミだにも遁ヌクれ得ぬト。王ミコ  
 位イを犯トし給タマハはんは神罰カミバツも恐オソろし  
 やヤこの上ノヘは事コトの由ユを伺ウカガひ給タマハは  
 などナド聞クし召メし直ナされでデ嵐ハルカの山松ヤママツ

の幾ナニススも限リらじナ。その上ノヘ  
 これコレによりヨリ君ミコと臣ウヂとをくらぶるに  
 親疎シンソを分ワく事コトなく君ミコにつツき奉ホる  
 こそ忠臣チュウジンの法ホウと聞クくものヲを道ミチ  
 理リとひがヒガことコトを並ナぶるニいかで道ミチ  
 理リにつツかさサらんとト涙ナミダを流ナして  
 宣ノボへばバわが子コに諫シめられレ心ココロならず

もどまりけり

徑山寺

涙を流す志誠知られて早蕨  
の手を合はせ禮拜し御僧の  
前に跪くげにや昔も小林の  
邊に立ちし雲の内芭蕉の  
傷りはあらじと見えてあはれなり

然るに宗門と申すは起直入如  
來地その故を如何なれば十界は  
悉くたゞ一心の上にある一念不生  
の直路には佛も衆生もいづく  
にかさてあるべきこれぞ眞の空  
界邪念みだりに起るともそれ  
をも敢て拂はじ糸を亂せる

柳は緑なる色をそのままに錦を  
 織るとよ花は又紅の色の外そ  
 なきかやうに悟ればたゞ未悟の  
 時に違はずこの未悟に至るを  
 こそ如来地とは申すなれ

島廻

この島の四方を遙かに見渡せば

漫々とある海上の水の煙は霞  
 にて里はそことも白波の汀の  
 松は麓に見えてぶは高きより  
 まづ近し北に向へば雁がねの  
 雲路を分けて帰る山有乳の山の  
 新玉の年の始めの頃なれば  
 侍らし花かと疑ふは消え残る

雲の木の芽山東は伊吹おろし  
 の烈しきに霞まぬ月の余吳の  
 湖南を遙かに見渡せば三上犬  
 上鏡山見馴れし夢の鳥籠の  
 山いざと答へて包めども契りは  
 よそに守山なほもそなたの  
 なつかしく忍ぶ思ひを志賀の

お里花園の花や教らんと思  
 ひ長等の旅に立つ心や物に狂ふ  
 らん比叡山と申すは餘り名高  
 き山なれば言葉も及び難し  
 の山に續いて次第に末を見渡  
 せば横川の水の末かよ比良  
 の湊の川音は嵐や共に流れ松

岩こそす波のうら下し。神と齋  
 ふも白髭の沖なる松の高島  
 やゆるぎの森の鷺すらもわが  
 如くひとり音をよも鳴かどか  
 れよりもこれよりもたゞこの島  
 どありがたき童男化女が船の内  
 見ずは帰らどと誓ひけん蓬

菜宮と申すともこれにはよもま  
 さらど汀の清水巖にかゝる青  
 苔青山雲に懸つていづれも共に  
 碧き海 緑樹影沈んで魚も  
 梢にのほり。月海上に浮かんで  
 兎も波を走れり。すべて耳に觸れ  
 目に見る事の何れかは大慈大悲

の誓願に漏る事やある

阿古屋松

名にや雪降りて年の暮れぬる  
時までも終に朽らせぬ松が枝  
の老木になれども年々にまた  
若緑立枝の幾春の恵みなる  
らん秦の始皇の御爵にあづ

かる程の木なりとて異國にも  
本朝にも今もつてこの木を  
賞翫す 千年まで限れる松  
もけいよりは君に引かれて萬  
代までの春秋を送り迎へて序  
陰山高砂位の江唐崎や都の  
富士も東ぞと三保の松原栗原

や。あねはの松の人ならば都のつ  
とに誘ひなんあはれ阿古屋の松  
かげの名高きや類ひなかららん

上宮太子

<sup>サシ上</sup>欽明天皇三十二年。睦月一日の夜  
半に。赤夢想の告あり。金色の  
僧來り給ひ后に告げて宣はく。

われに救世の願あり。則ち后の赤  
胎内に宿るべしとありしかば  
<sup>クセト</sup>后答へて宣はく。妾が胎内は垢  
穢なり。いかで貴き赤體を宿  
し給はんとありしかば。僧重ね  
て宣はく。われは垢穢を厭はず  
た望むらくは人間に着到せん

がためなり。后辞するに所なし。  
兔も角もとありしかば。この僧  
大きに悦んで。后の御口に飛び入  
り給ふと。お覽どて。曉月軒にか  
やき松風夢を破つて。五更の天  
も明けにけり。帝この由聞し  
召し悦びの色をなし給ふ。后必ず

しやうらんを生み給ふべしとあ  
りしかば。隙行く駒を敷系がねば。  
大鼓提河の池の水澄まで濁れる  
如くにて。十二月と申すには。南殿  
の亭廐にて。お産平安皇太子誕生  
なる。既戸の皇太子と申すも。上宮  
太子の御事。



反魂香

上歌  
 立ち去りて跡もなく形も消え  
 て跡はたゞ煙ばかりぞ反魂の  
 孝行の子ならばなどや暫くも  
 留まらぬ傳へ聞く漢王は李夫  
 人の別れゆゑ甘泉殿の床の上  
 に古き衾の恨みを添へ九華帳

の中にてはこの香の煙を立て  
 の夜更け行く鐘の聲艶容便  
 便と氣色だつ玉殿にうつろひて  
 李夫人の御姿ほのかに見え給  
 へり三五夜中の新月の夜半  
 の空隈なくして長安雲上の粧ひ  
 氣色に至る心地して皆感涙をう

るほせば君も龍顔に御袖をお  
し當てて反魂の煙の内に立ち  
寄らせ給へば又李夫人は消え  
消えと時雨も交る有明の見え  
つ隠れつかげろふのあるかなき  
かの御姿かくやと思ひ知られ  
たり

松浦物狂

生國は筑紫肥前の者。在所は松  
浦わざと名字をば申さぬなり。  
或人の妻にていひひしが夫は讒臣  
の申し事により。無實の科を蒙  
り。都へより給ひしが曾て音信  
聞かざれば死生をだにも辨へず

餘り別れの悲しさに或夕暮  
に我等たゞ二人玉島や松浦の  
浦に立ち出づる都の方へ行く船  
の便りを待つべき所に男一人來り  
てわれこの船の船頭なり御姿を  
見奉るに世の常ならぬ人なれば  
痛はしく思ひ申すなり疾く疾

く船に召さるべし都までは送り  
とぞけ申さんと懇に語れば眞  
ぞと心得て手を合はせ禮拜す  
急ぎ船に乗り移りその時水  
主楫取ども順風に帆を揚げて  
海路を走り行くほどに程なく津  
の國須磨の浦に着く彼の世

まもる所なれば。この浦に船を  
さし留む

笠取

即ち<sup>サシ上</sup>花開けぬれば。天下は皆春  
なりしに。梅花雪を帯びて。白妙  
まどる青柳の梢に遊ぶ花鳥の  
翅にかけらる花の粧ひ。鶯の笠に似

たればとて。梅の花笠とは。名づ  
け給ふ<sup>御</sup>御詠に。青柳を片糸に  
よりて。鶯の縫ふてよ。梅の花笠  
との<sup>叡</sup>感<sup>普</sup>普<sup>御</sup>御神詠<sup>末</sup>末の世  
までも。白ひくく山高み。花の  
香久に残ればとて。天の香久山  
と今に。名高き山とかや。かやうに

叡感の。普き花の姿を。盆に  
 似たりと。詔。妙なる梅花の顔  
 ばせ色美しき粧ひまで。濃淡の  
 氣色白ひ添ふ。柳の眉の飾り  
 までも。花笠の縫ふ。いと  
 畏き御詠なり。侍。侍笠と  
 申せ宮城野の。木の下の露は。雨に

まさりて。夕日かげさす。や三笠  
 の山高み。こゝにも。薄青の衣笠  
 山も近かり。き所から。この山陰  
 の秋の暮。くぐるとも。よも濡れ  
 笠取山の。もみぢら葉は。行きか  
 人の袖の。みぞ。照るや。木の間の雨  
 ならば。拂はずと。袖や。ほさまし

蛙

昔<sup>ヨシト</sup>壹<sup>サシ</sup>岐<sup>ノ</sup>の守<sup>ノ</sup>河<sup>ノ</sup>某<sup>ト</sup>と申<sup>シ</sup>し雲<sup>ノ</sup>の  
 上<sup>ニ</sup>人<sup>ハ</sup>あか<sup>ラ</sup>らさま<sup>ナ</sup>なるこの宮<sup>ノ</sup>路<sup>ニ</sup>に  
 行<sup>キ</sup>き留<sup>マ</sup>りし海<sup>ノ</sup>士<sup>ノ</sup>少<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>の假<sup>ノ</sup>  
 苦<sup>ノ</sup>屋<sup>ノ</sup>の板<sup>ノ</sup>庇<sup>ノ</sup>久<sup>ク</sup>にもあ<sup>ラ</sup>ぬ一<sup>ト</sup>夜<sup>ト</sup>  
 の契<sup>ノ</sup>り思<sup>ヒ</sup>ひの妻<sup>ト</sup>となり<sup>タ</sup>るなり  
 そのま<sup>マ</sup>きぬ<sup>ギ</sup>ぬの袖<sup>ノ</sup>の名<sup>ノ</sup>残<sup>リ</sup>

も引<sup>キ</sup>き留<sup>ム</sup>むる心<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>も帰<sup>ル</sup>  
 さに年<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>積<sup>ル</sup>る心<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>して又<sup>モ</sup>この  
 浦<sup>ニ</sup>に立<sup>チ</sup>ち帰<sup>リ</sup>。向<sup>ヘ</sup>は行<sup>方</sup>も  
 白<sup>ク</sup>波<sup>ノ</sup>のあ<sup>ハ</sup>はれはかな<sup>キ</sup>契<sup>リ</sup>  
 ゆゑ面<sup>ノ</sup>影<sup>ノ</sup>残<sup>ル</sup>る海<sup>ノ</sup>際<sup>ニ</sup>に立<sup>チ</sup>出<sup>デ</sup>  
 夕<sup>マ</sup>まぐ<sup>レ</sup>濱<sup>ノ</sup>の真<sup>ノ</sup>砂<sup>ヲ</sup>を踏<sup>ミ</sup>  
 渡<sup>ル</sup>。蛙<sup>ノ</sup>の道<sup>ノ</sup>跡<sup>ヲ</sup>見<sup>レ</sup>ばあ<sup>リ</sup>

言の葉あらはる。心を知れば  
疑ひも涙ながらもつくづく  
と思へば。よ。なん界も。水の底  
なるうろくづや。藻に栖む蛙う  
たかたの。あはれ江による心なれ  
ば。六趣四生に廻りめぐる。車の  
輪の如く。鳥の翅や。花に鳴く鶯

も。同。浄法なる。言の葉を囀  
る。蛙こそたぬしなりけれ

亂曲下卷

博多物狂

更科

賀茂物狂

美人揃

妻戸

隱岐院

由良物狂

横山

五輪碎

飛鳥川

俱利伽羅落



博多物狂

名ヲ 博多物狂  
 つらつら 浮世の有様は 夢に住ん  
 で 現とす 人界を案ずるに 水の  
 上の 淡雲海上に残る 捨小舟の  
 波に 日を送りて 風に迷ふ如く  
 なりや 生 死の海 の 面  
 煩悩の波 しげく 罪障の雲霧に

真如の月は隠るとも。一念稱名の  
力にて涼き道に到りなば。  
これやこの極樂の彌陀光明を  
身に受け得脱をまさた得んと  
せり。南無歸命彌陀尊願をかな  
へ給へや。

更科

悲しきかなや惡業は山よりも  
高く善根は塵程も貯へずかく三  
途の故郷に歸つて本願の臺に到  
らざらんは歎きの中の歎き悲し  
みの中の悲しみたり。草露悉く春  
を迎へては花葉共に後び。松風に  
先だつ山桜は早く無明の夢覺

中下 中下 中下 中下  
め。月ツキに落おちくる曉あけは別わか離りの雲雲  
にや洗せんむらん 花はな橘たちの香かをどめ  
て昔むかしの人ひとを尋たずぬれば親おや疎そ幾いば  
くか去さりぬ。かゝる思おもひの深ふか見み草くさ。  
妹いもうととわが寝ねる常とこ夏なつの花はな一時ひとときの夢ゆめ  
の世よと。知しらでや人ひとの迷まよひらん

賀茂物狂

サシ上  
げにやその神かみに祈いのりし事ことは忘れ  
しを。あはれはかけよ賀か茂もの川がは波なみ。  
立ち帰かへり來きて行ゆ末すえの誓ちかひを  
頼たのむ逢あ瀬せの末すえ。憐あはれ又また垂たれて玉たま。  
簾すだかゝる氣き色いろを守まもり給たまへ。あれも  
その四よ手てに涙なみだどかゝりにまま。又またい  
つかもと思おもひ出いでしま。涙なみだなが

らに立ち別れて都にも心どめ  
東路の末遠く聞けばその  
名もなつかし思ひ亂れし信夫  
摺誰ゆゑぞ如何にとかたんと  
する人もなし鄙の長路におち  
ふれて尋ぬるかひもなくそ  
の面影の見えざればなほその方

の覚来なく三河に渡す八橋の  
蜘蛛手に物を思ひ身はいつくを  
そこと知らねども岸邊に波を  
掛川ふ夜の中ふなかなかに命の  
内は白雲の又越ゆべしと思ひま  
や花紫の藤枝の幾春かけて  
白ふらん馴れに旅の友だにも

心岡部の宿とかや。葛の細道分  
け過ぎて著馴れ衣を。宇津の山  
現や夢になりぬらん。見聞くにつけ  
て憂き思ひなほこりずまの心  
とて又歸り來る都路の思ひの  
色や春の日の。雲居の影は一入  
の柳桜をこきませせて。錦をさ

らす経緯の霞の衣の匂やかに  
立ち舞ふ袖も梅が香の。花やか  
なりし春過ぎて。夏もはや北祭  
けよ又花の都人。行きかよ袖の  
色々に。貴賤群集の粧ひも翻す。  
袂なりけり

美人揃

およそ伊勢物語に見えたるは  
 以上十二人なり。第一は紀の有常  
 が娘。第二には忠仁公の御息女  
 清和天皇の后宮に深殿の后と  
 れなり。第三は長柄の御の  
 御娘。第六は筑紫の深川の里の  
 女なり。けり。第七は増尾の御の

妹に戀死の女これなり。十一は周防  
 の守在原の仲平が娘なり。けり  
 十二には大和の守繼景が息女に。今  
 の伊勢にてありしが。その名の所  
 を書きかへて。后宮の上臺に猿  
 子の前とぞ召されける。任吉の社  
 に参りて。日數を送り祈念する。

懃誠コソコトきつりに隙ヒマなくは感應カネウタウいか  
でなからんと頼タカみを深くかけま  
くも。畏オソき神カミの御前ミマエにて靜シズカかに  
法施ホウセを冬フユらせ宮人ミヤヒトとおぼしき  
老體ラウタイにこの物語モノガタリを尋ヒねるに  
いごとよ對面タイメンの始はじめめに伊勢物語イセモノガタリ  
の眞儀マギをくれくれと語カらんは

且かつはそら恐おそろし且かつは道みちの聊爾シヤウニ  
なりとて左ひだり右みぎなりものなもいは  
ざりけり美人メイジンの中なかにとりてはいつ  
れか劣おとり優まさらん

妻戸ツメド

比叡山ヒケイサン延曆寺エンリョウジの座主ザヌ法性坊ホウセイボウの  
僧ソウ正ただとして貴たかき人ひとおはしますこの

人<sup>ニ</sup>は<sup>ハ</sup>三<sup>ニ</sup>伏<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>夏<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>夜<sup>ニ</sup>。五<sup>ノ</sup>更<sup>ノ</sup>も<sup>モ</sup>未<sup>ダ</sup>だ  
明<sup>ケ</sup>け<sup>ズ</sup>る<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>九<sup>ノ</sup>識<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>窓<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>前<sup>ニ</sup>十<sup>ノ</sup>乘<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>  
床<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>ほ<sup>ト</sup>り<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>瑜<sup>ノ</sup>伽<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>た<sup>テ</sup>  
て<sup>テ</sup>三<sup>ノ</sup>密<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>す<sup>マ</sup>ま<sup>シ</sup>見<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>  
妻<sup>ノ</sup>戸<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>ほ<sup>ト</sup>ほ<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>敲<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>聲<sup>ノ</sup>す<sup>ナ</sup>り<sup>ニ</sup>。  
誰<sup>ナ</sup>なる<sup>ラ</sup>ら<sup>ン</sup>と<sup>ト</sup>思<sup>フ</sup>ふ<sup>ル</sup>召<sup>シ</sup>し<sup>テ</sup>戸<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>開<sup>ク</sup>  
き<sup>テ</sup>見<sup>ル</sup>給<sup>ヘ</sup>ば<sup>ニ</sup>。過<sup>ギ</sup>ぎ<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>や<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>

五<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>に<sup>ニ</sup>世<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>早<sup>ク</sup>う<sup>ク</sup>す<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>聞<sup>ク</sup>え<sup>シ</sup>菅<sup>ノ</sup>  
丞<sup>ノ</sup>相<sup>ノ</sup>に<sup>ニ</sup>て<sup>テ</sup>お<sup>は</sup>し<sup>マ</sup>す<sup>ル</sup>。不<sup>レ</sup>思<sup>フ</sup>議<sup>ヤ</sup>  
と<sup>ト</sup>思<sup>フ</sup>め<sup>シ</sup>。請<sup>フ</sup>ト<sup>ト</sup>入<sup>レ</sup>奉<sup>リ</sup>。深<sup>ク</sup>夜<sup>ニ</sup>  
の<sup>ノ</sup>光<sup>ノ</sup>臨<sup>ム</sup>何<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>か<sup>は</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>し<sup>シ</sup>  
か<sup>ば</sup>。菅<sup>ノ</sup>相<sup>ノ</sup>答<sup>ヘ</sup>て<sup>テ</sup>宣<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>。濁<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>世<sup>ニ</sup>  
に<sup>ニ</sup>生<sup>マ</sup>れ<sup>テ</sup>無<sup>レ</sup>實<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>讒<sup>言</sup>力<sup>ナ</sup>し<sup>シ</sup>  
讒<sup>臣</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>た</sup>を<sup>ノ</sup>報<sup>ゼ</sup>ん<sup>タ</sup>め<sup>ニ</sup>。雷<sup>ト</sup>



ならん時。善臣ばかりこそ。威光  
めでたういかなる勅使なりとも。  
内裏に参り給はずは。生々世々  
にこの恩をなどかは報せざるべき。  
この御歎きは申しても餘りある。  
いかなる勅使なりとも。二度  
までは参るまじ。勅使三度に及ば

ば。普天の下。率土の内王土にあ  
らずといふ事なし。そのみはいか  
かと宣へば。菅丞相の御色は。殊  
の外にかはりつ。折節御前に。松  
榴を置かれたりしを。おの取り口  
に含んでば。らはらと嘔み碎き  
妻戸にくわつと。吐きかふる。赤き

拓榴は忽らに火焰となつて妻  
戸に三尺ばかり燃え上る。僧正見  
給ひ海水の印を結んで鏤字の  
明を請せしかは。火焰は消えに  
けりやなその妻戸は。山よの本  
坊に今もありと聞ゆる。

隱岐院

承久三年七月八日の日。時氏鳥羽  
殿に参りて申しけるは。世はかり  
にて渡らせ給ひゆなり。出出家な  
くては叶ふまじと。情なく申し上  
ぐれば。力及ばせ給はずして。  
やがて御髪をおろされたり。綺  
羅の御姿を引きかへて。納衣を御

身に奉り御似せ繪を書かせ給ひ  
て七條の女院に参らせらる。女院  
御覽トあへずして。修明門院と  
同車あつて鳥羽殿に幸なら  
せ給ひて庭上に御車を立てら  
れければ一院も御簾をかげて  
御頼ばかりさう出だしてまたとく

とく御歸りあれとばかりにてや  
がて御簾をおろされけり程  
なまき一目の御契り御身も心も  
燃え焦がれ煙の内の苦しむもかく  
やと思ひ知られたり。さらでだに  
悲しがるべき。初秋の夕暮にあは  
れすむる折節もあり。秋の山

風吹き落ちて御身にこそはみ  
渡れと隠岐の海の荒磯の新島  
守は誰やらん

同

出家の後はかくても鳥羽殿に  
渡らせ給ふべきやらんと御心安  
く思ひ召さるる處に時氏又参りて

隠岐の國へ流し奉る御供には  
男女以上五人なり前躰の敬言衛  
もなふ百官の扈後するもなし  
庶人の旅に異ならず道すがら  
の御有様誠にあはれなりけりさ  
てもこの島に渡らせ給ひて海士  
の郡荊田の郷といふ所に海産を

構へたりければ、たゞ海士人のすみ  
かに異ならず。昔は蟠洞紫山の  
うらちにして、春秋を送り迎へて  
樂しむ盡くる事なし。今は苔屋  
の庇蘆垣の月洩り風もたまらね  
ば。晝もつら、夜も憂し。女御更  
夜のその拜所もなく。月御雲客

の拜趨もなし。なほ懷舊の御涙に  
まどろませ。給ふ夜半もなけれ  
ば。この彼たゞもとに立ちくる心  
地して。須磨の浦の昔まで。思  
召し出ださる

由良物狂

古人に相馴れて、偕老同穴淺か

ならず。同く契りと思ひしに。人の心の  
 花かよよ。葛城山の峯の雲よを  
 に通ふと聞き。よりひとり心は  
 住吉のねなくも人に待つといは  
 れどと思ひ。に又男山の女郎花  
 のくねる心にあくがれ出でて。涙の  
 雨の古里を。足に任せ。立ち出づる

<sup>ツク</sup>由良の湊の海。舟和泉の國に  
 着き。かば。信太の森の葛の葉の  
 暫し待たんと。思へども。われには  
 人の帰らず。問はれ。程は待ち馴  
 れ。夕べの堺の鐘を聞き。難波の  
 寺に参れば。彼の國に生まる。心  
 地して。西を遙かに伏し。拜み入江の

蘆の假の世にいつまで物を思ふべ  
 き。濃き墨條に様変へ誠の道に  
 入らばやと思ひ長柄の橋柱千度  
 まで悔しきは捨てざりし身の古  
 過ぎに一方の旅衣春も半ばに  
 なりしかば花の都に上りて清水  
 寺に参れば大慈大悲の日の光

艶々とある地主の橋誠まことに権現  
 の誓ひかや花のあたりは心して  
 松には風の音羽山音ねに聞きし  
 よりもなほまさり貴さおもし  
 ろさに下向の道も覚ええず

同

かくて夜に入れどまどろむ隙も

なぐして。寺名を唱へて居たりし  
 に。同じさまに通夜して。近く寄り  
 添ふ男あり。語らひ寄りて申す  
 やう。痛はしや御身は思ひありと  
 見えたり。思し召す事あらば。心  
 の中を語りて。御慰みもあれかし  
 と。懇に申せば。頼もしく思ひて。

立ち寄る蔭もなき身なり。様變  
 へたきと申せば。痛はしき事かな。  
 わが住む里に暫く。足を休め給ひ  
 て。眞に様を變へ給はば。然るべき  
 尼寺に引きつけ奉るべし。疾く疾  
 くと誘はれて。身を浮草の根  
 を絶えて。清水寺を立ち出でて。



なほも思ひを志賀の浦。大津と  
 かやに下りぬ。 矢橋の浦の渡  
 守。さうてそことは白波を盗人と  
 は思はで東路さうて浮かれ行く。  
 過ぎに一方も覚えず行く末は。  
 なほ遠江の掛川の宿に幸たけ  
 て。又越ゆべしと思ひまきや。命なり

けり。小夜の中。山なかなかに残  
 る身ぞつらき。

横山

その頃いまだ荒鷹の。夜末の月の  
 山にり。野に出づる日の暮るを  
 も。白斑の鷹を失ひて。鳥の落  
 草かきわけて。尋ぬる鷹を翁や

知りてはんべると。下す宣旨も  
 重き鷹を。通決鏡にあらはした  
 り。これぞ野守の鏡なる。又わが  
 朝のその昔。在原の中將。二條の  
 后に参りしを。如何なる人が大君  
 に。黄楊の小櫛の鬘の髪さし  
 たる科にふせられ。遠流の身と業

平は當國に下りて入向の郡三芳  
 野や。今うの川越の山家の郷にあ  
 りしに。里の長のひとり。姫儲の君  
 ともてなせば。鄙人なりといへ  
 ども。その形らうたけて心に情  
 有明の月にかゝる小夜時雨やも  
 め男のあくがれて。宵々ごとに

通ひ路の閑守に姿を見えどと  
 将衣の袖をうちかづき指貫の  
 そばを高く取り足早に歩み行  
 きつ 君が圍もる窓の隙垣  
 間見ぬれば妻しあり遙々來  
 ぬるまぎぬまぎぬの別れとなれば  
 戀しくて三芳野のたのむの雁

もひたふるに。君が方にぞよると  
 なくなるとれは秋狩る鹿の聲  
 妻戀の歌の心なり。又夏狩の玉  
 江の蘆。悪しく語りなば。當座の  
 恥辱家の恥よしよ。いはじた  
 酒飲うで遊ばん

五輪碎

初<sup>サシ上</sup>生<sup>ハト</sup>婆<sup>ア</sup>婆<sup>カ</sup>世<sup>シ</sup>界<sup>ノ</sup>朝<sup>ラ</sup>霧<sup>ニ</sup>に<sup>。</sup>四<sup>シ</sup>魔<sup>ノ</sup>滅<sup>ス</sup>  
 行<sup>レ</sup>く<sup>。</sup>舟<sup>ヲ</sup>を<sup>。</sup>し<sup>。</sup>ぞ<sup>。</sup>思<sup>フ</sup>ふ<sup>。</sup>舟<sup>ヲ</sup>を<sup>。</sup>し<sup>。</sup>ぞ<sup>。</sup>  
 思<sup>フ</sup>ふ<sup>。</sup>と<sup>。</sup>詠<sup>マ</sup>れ<sup>。</sup>た<sup>。</sup>る<sup>。</sup>は<sup>。</sup>ぞ<sup>。</sup>れ<sup>。</sup>三<sup>ニ</sup>世<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>  
 可<sup>ク</sup>得<sup>ル</sup>の<sup>。</sup>道<sup>ノ</sup>理<sup>ナ</sup>り<sup>。</sup>ほ<sup>。</sup>の<sup>。</sup>は<sup>。</sup>白<sup>シ</sup>し<sup>。</sup>ほ<sup>。</sup>  
 の<sup>。</sup>は<sup>。</sup>赤<sup>シ</sup>し<sup>。</sup>白<sup>ク</sup>骨<sup>ハ</sup>は<sup>。</sup>父<sup>ノ</sup>の<sup>。</sup>恩<sup>。</sup>赤<sup>ク</sup>肉<sup>ハ</sup>は<sup>。</sup>  
 母<sup>ノ</sup>の<sup>。</sup>恩<sup>。</sup>赤<sup>ク</sup>白<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>體<sup>ナ</sup>り<sup>。</sup>阿<sup>ノ</sup>字<sup>ノ</sup>門<sup>ニ</sup>は<sup>。</sup>  
 即<sup>チ</sup>ち<sup>。</sup>父<sup>母</sup>の<sup>。</sup>恩<sup>。</sup>徳<sup>ナ</sup>り<sup>。</sup>さ<sup>。</sup>れ<sup>。</sup>ば<sup>。</sup>ほ<sup>。</sup>の<sup>。</sup>

ぼ<sup>。</sup>の<sup>。</sup>と<sup>。</sup>和<sup>シ</sup>合<sup>ス</sup>て<sup>。</sup>母<sup>ノ</sup>の<sup>。</sup>胎<sup>内</sup>に<sup>。</sup>宿<sup>リ</sup>  
 始<sup>ム</sup>る<sup>。</sup>月<sup>ノ</sup>の<sup>。</sup>間<sup>ヲ</sup>を<sup>。</sup>南<sup>無</sup>と<sup>。</sup>い<sup>フ</sup>  
 二<sup>ニ</sup>月<sup>ノ</sup>に<sup>。</sup>八<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>の<sup>。</sup>月<sup>ノ</sup>か<sup>。</sup>の<sup>。</sup>胎<sup>内</sup>に<sup>。</sup>人<sup>身</sup>  
 きた<sup>。</sup>る<sup>。</sup>所<sup>。</sup>無<sup>明</sup>闇<sup>夜</sup>の<sup>。</sup>中<sup>ニ</sup>に<sup>。</sup>光<sup>明</sup>  
 出<sup>カ</sup>な<sup>。</sup>る<sup>。</sup>が<sup>。</sup>如<sup>シ</sup>し<sup>。</sup>三<sup>ニ</sup>月<sup>ノ</sup>に<sup>。</sup>り<sup>。</sup>や<sup>。</sup>う<sup>。</sup>て<sup>。</sup>  
 ん<sup>。</sup>ご<sup>。</sup>す<sup>。</sup>來<sup>。</sup>る<sup>。</sup>所<sup>。</sup>三<sup>ニ</sup>鉦<sup>ノ</sup>の<sup>。</sup>體<sup>。</sup>彌<sup>ノ</sup>の<sup>。</sup>字<sup>ノ</sup>  
 の<sup>。</sup>形<sup>。</sup>な<sup>。</sup>る<sup>。</sup>を<sup>。</sup>ば<sup>。</sup>朝<sup>霧</sup>と<sup>。</sup>は<sup>。</sup>詠<sup>ま</sup>れ<sup>。</sup>

記曲下

七

たり。四月に成就すれば地水火風  
 の四大有相。臨終を司つて。陀の  
 字の形をば鳥がくれ行くと詠ま  
 れたり。五月に人形すれば無作三  
 身の法佛は即ち法の如くなり。  
 有相無觀。三昧なるをば舟をし  
 ぞ思ふと詠まれたり。されば身

體五臟六腑を父母に受けあへて  
 傷ひ破らざりせば。三十二相八十  
 種好の佛。南無阿彌陀佛これな  
 り。諸身は己心の彌陀唯心の淨土  
 とも觀たり。又天台伽訶羅縛  
 に表徳して信心妙法蓮華經  
 とも釋したる。佛未出世父母未

生以前。本來の面目もこの歌の  
 心なり。さてこそ。佛法和歌の道。  
 神慮に叶ふと詠まれたり

飛鳥川

五月雨に物思ひ居れば時鳥夜  
 深く鳴きていづち行くらんと詠  
 みし心も今更に身に白糸の夜

となく。晝ともわかであだ世  
 のいつまでとてかなからへん思  
 へばあはれ。胡蝶の夢に遊ぶと  
 けしの現なる。津田屋守今日  
 は五月になりけり。急げや早  
 苗。生ひもこそすれ。げにや五月  
 雨の晴れぬ日数も舊り行くに。

明日となないひそ飛鳥川の氷田  
 の深緑立ち連れいざや植ゑり  
 よ。そもそも我許の田を作れば  
 か時鳥四年の田長を。朝な朝な  
 呼ぶと。詠せりも真なり。四年  
 の山田の時過ぎてこの土に來り  
 聲立て。程時過ぐる世の中の

教へを知る故に時の鳥とは申  
 すなり。五月山。梢を高み時鳥  
 鳴く音空なる戀やすむれも  
 戀しきみどり子の行方も知らで  
 足引の山路に迷ひ里に出でて。國  
 國浦々わたる日の。積る三年の春  
 過ぎて。夏もはや五月雨の振分

髪ガミの玉タマかづらカズラ。かカる業ノブはいつか身ミ  
 にニ剃カ衣イ袖スエひぢヒヂていイざサいイざサ早ハヤ苗ナエと  
 らラうウよヨ

俱利伽羅落

名ナノ中ナカヲラ、  
 たる程タラシに夜ヨに入イればレバ敵カキに大勢オホセと  
 見えんミエためタメに千頭チヅの牛ウシを集ツめ  
 て皆角ツノの先サキに火ヒをとトもモ追ツつ

拂ハひ給キへばバ光ヒカ虚カ空クウに充ミち満ミち  
 てテ五月イツキ闇ヤミ覺サト束ツクなくクも暗サき夜ヨ  
 も暗サからぬ星ホシを集ツむれば敵カキ大  
 勢セと心得ココロエさサうウなナりかカり得エざり  
 しを今井イマヰの四郎シロウ六千餘騎ムササキノチ大  
 手テより鬨トキをつツくればバ後ノチの林ノの五  
 萬餘騎マンノチノチ一ヒト度トに鬨トキをミとト合アはす



362  
435

著作權  
所不類  
印



昭和九年五月廿五日 納本  
昭和九年九月廿五日 發行

橋本真吉

訂定著作者 觀世 左近

發行兼 印刷者 檜 常之助

發行所 檜 書店  
京都店  
京都市二條通越屋町東北角  
振替大阪三六一八番、電話上二九〇番

れば敵取る物も取りあはず俱利伽  
羅が谷にはつと落つ。馬には人  
には馬。落ち重なり落ち重なり。  
七萬餘騎は俱利伽羅が谷の深  
きをも浅くなる程埋めたりけり

新編  
二四

終

